

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作: ウッチャン大好きっ子

\* <>で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

\* 今回から解説が二つになりました！

☆新キャラ

今回はおりません。

### ☆解説Ⅰ (既に存在する言葉について)

1. ホムンクルス・・・錬金術の1つで人工的に作り出された生命体(人間)の事である。

### ☆解説Ⅱ (私が作ったオリジナルの言葉について)

1. 気壁 (きへき)・・・術士の周囲に気で作られた絶対防御の壁を作り出す気功術。
2. ブラックダウン・・・これは自分自身の心の闇 (夜叉) に飲まれてしまい、自分を失ってしまう現象。  
この現象は、心に必ず闇を持っている人間なら誰でもなる可能性がある。  
しかし、この現象は自力で治癒する者もいるが、心に強い闇を持っていると  
そのまま”廃人”になったり、人格が入れ替わってしまう。
3. 夜 叉・・・心の闇が形を成した (人格として成立してしまった) もの。  
キレるなど突然、人が変わるのは、この夜叉が表に出てきたからである。  
もちろん”悪意”だけが”夜叉”になるという訳ではない。  
元々存在する言葉の意味は、インドの姿・形の恐ろしい悪神で、  
後に仏法を守護するものとされておりませんが、それとは異なるものと考えて下さい。

～第55章～<素質>

ー武道場1ー

二人は気を安定して発する方法を練習を始めた。

それを蒼凱は微笑ましく思いながら静かに見ていた。

『プロフェッサーが、こうして何かを教えるのは久しぶりだな。何だか嬉しそう。』と蒼凱はのどかに思っていたが、二人はそれどころではなかった。

プロフェッサーは凱歌の秘めたる気の大きさに舌を巻きつつ、それをコントロールする難しさに頭を悩ませていた。

その苦悩を知ったか、凱歌も自分の内に秘められた巨大な”力”に驚きつつ、それを扱えない自分に早くも焦りと悔しさを感じていた。

その時、凱歌は一瞬黒い影のような者が、隣に立ったような気がして、横を見たが誰も居なかった。しかし、それはこれから起こる事件への前触れだった・・・。

ー武道場2ー

きなこは天山から太極拳の基本を教えられていた。

太極拳は”誰もが体内に持っている生体エネルギー「気」を力に変え、それと共に技を持って戦う”。

天山はきなこの中にある”気”を、話しをしながら、量っていたが、その素質を見極めきれずにいた。

『仕方が無い』と天山は思い、きなこの方を向くと、気まずそうな表情で言った。

「きなこさん、悪いんだけど少しの間何も考えず、目を閉じてくれないかな？少し調べたい事というか確かめたい事があるんだ。」と天山は言った。

「えっ。目を閉じて何も考えずに、居ればいいんですか？」ときなこはびっくりしながら言った。

「いいと言うまでの間だけ…。本当に何も考えないで居てくれればいいんだ。」と天山は言いながら、内心では違う事を考えていた。

『何も考えないというのは意外と難しいんだけどな～。ましてやきなこさんの場合は…。』

と天山は思ってしまった。

「分かりました。じゃあやりますよ。」ときなこは言うとも目を閉じ何も考えない様にした。

天山は静かにきなこの前に立ち、両手をきなこの頭の上にかざし、目を閉じ集中した。

その瞬間、きなこは心を覗かれている様な気がした。それが”無の境地”の妨げになってしまった。

『まずいな。きなこさんの意識が安定してないからうまく量れない。それでも一瞬”無の境地”で居てくれたから、大まかな量が分かったから良しとするか…。しかし、予想以上に純度の高い気を持っているようだ…。これからの鍛錬次第でいくらでもなるというわけか…。責任重大だな～。』

と顔を歪めながら天山は納得し、目を開けた。

「もういいですよ。やっぱり難しかったですか？”無の境地”は。」と天山は優しく言った。

「何も考えない様にすると今まで気にもしなかった事が気になっちゃって…。」ときなこは反省気味に言った。

「そんなものですよ。完全な”無の境地”が出来たら、気の扱い方を教える必要ありませんからね。」と天山は自分に皮肉を言う様に笑って言った。

その時、天山が何かに気が付いたかの様に振り返った。きなこはその警戒するような怖い顔をした天山に驚き、天山が振り向いた方を見た。

そこには壁があるだけだった。しかしきなこは急に胸がドキドキし始めた事に驚いた。

「きなこさんはここに居て下さい。ちょっと見てきますから！」と言い終えると慌てて天山は武道場を出て行った。あまりに強い口調だったので少し固まってしまったが、きなこの勘が”追うべき”と感じ、慌てて後を追いつけた。

-廊下-

慌てて早歩きで進む天山の前から走ってくる者を見るや、『自分の感覚が正しかった』と思った。

そして二人は同じ扉の前で止まった。前から走ってきたのは龍冴だった。それもかなり動揺していた。

「やっぱり龍冴も感じました。あの”邪悪な気”を。」と天山は確かめる様に言った。

「ああ。あれは間違いなくここから発せられたものだ。まずい事になったかもしれないぞ。」と龍冴はただならぬ表情で言った。そこへ、きなこが追いついて来た。

「きなこさん！？待って下さいと言ったじゃないですか！」と天山は慌てて言った。

「居ても立ってもいられなくて。あっ龍冴さん！今までどこに行ってたんですか？」ときなこは弁解した。

「いやそれは…。って今それどころじゃない！きなこさんは何も感じなかったんですか？」と龍冴は驚きの表情を浮かべて言った。

「天山さんが見た方向を見たら、急に胸がドキドキし始めました…。それで不安になって…。」と俯き気味にきなこが言った。

「まあ、行ってみますか。俺の嫌な予感が的中しない事を祈りつつな。」と、龍冴は言うとも目の前の扉に両手で押し開いた。その部屋は”武道場1”だった…。

## ～第56章～＜心の壁＞

### -武道場1-

龍冴達の目の前には凄まじい光景が広がっていた。そこには…。

壁に叩き付けられ、ぐったりとしたプロフェッサーと蒼凱。

その先に殺気にも似たおぞましい気を帯びた凱歌が、両膝を付いて空を見上げる様に立ち尽くしていた。

龍冴と天山はすぐに倒れている二人の元にそれぞれ急いだ。

「大丈夫か？一体何があった？」と龍冴はプロフェッサーを起こしながら言った。

プロフェッサーが僅かにうめき声を上げ、起き上がると苦しそうに口を開いた。

「”心の闇”に凱歌は飲まれてしまった…。このままでは。」とプロフェッサーが言っている最中に、龍冴は遮った。

「ダメだ！今の凱歌に近づいては危険だ！」と怒鳴った！

天山が凱歌に近づきなことを制止した。

「これ以上近づくときなこさんもプロフェッサー達と同じ、いやそれ以上の怪我をしかねません！」と血の気の引いた顔で天山は言った。

「どうして！ホイさんに近づいたら危険なの！？」ときなこは声を上げた。

その時龍冴がきなこの前に立った。

「その理由はこれだよ…。」と龍冴が静かに左手を凱歌に近づけた。

その表情は苦笑いに近い笑顔だった。

凱歌に1mほどの距離になった時、凱歌を中心に半径1mの円状に壁のような物が現れ、龍冴を吹き飛ばした。龍冴は叩き付けられずに上手く着地こそ出来たが、差し出した左腕から煙が立ち上り、静かに血が滴れた。苦痛で顔を歪ませながら龍冴が説明を始めた。

「これは気によって作り出された壁。これを我々は”気壁(きへき)”と呼んでいる。

気功術の上級者でなければ作り出せないものだ。しかし、今発生したのは凱歌の意識下に作り出す防御の壁ではなく、無意識に自分を守る為に作り出した境界壁だ。

そして凱歌の今の状態は、”ブラックダウン”と呼んでいる現象下にある。人には大小様々な大きさの違いはあるが、必ず心に闇を、”夜叉”を飼っている。その”夜叉”は時として表に出ようとする。それは常に理性が押さえている。ところが何かの拍子に出してしまう事がある。

この”ブラックダウン”は完全に”夜叉”が出てしまう前に、意識が心の闇に落ちてしまう、”夜叉”に囚われてしまった状態だ。ましてや凱歌は強い気を持っていて、気功術の素質がある。その為に自分の心を守る為に壁を作ってしまったが、それが仇になった…。

こいつは厄介な事に凱歌に近づくものを全て弾き返してしまう。そして、気は無限じゃない。

凱歌の今使っている気とは生体エネルギーを変換したものだ。使い過ぎれば命を落とす。

この状態が続けば、凱歌は確実に衰弱して死ぬ。

何とかして凱歌をこちらに戻さないと…。」と龍冴は左腕を確認しながら頭を巡らせていた。

「そんなの…。何とかならないんですか！このままじゃ…。」ときなこは黙ってしまった。

龍冴は左手で顔を覆うような格好をし、目を閉じて考えを巡らしていた。その時、右手が自然と首の

裏に伸びた。ハッとして様に龍冴が目を開け、意識を取り戻したばかりの蒼凱の元に駆け寄った。

突然の事に蒼凱は驚いたが、気にせずに龍冴が話し始めた。

「蒼凱！確か、あの脳波検査装置はコンピュータを経由せずに行えば、理論上接続した人間の精神に侵入出来るって言ってたよな？」と龍冴は訊いた。

「えっ、ええ。確かに理論上は可能のはずですが…。試した事もないし、ましてやあれはどちらの脳にも多大な負担を与えてしまいます。耐えられない可能性が大き過ぎます。互いの記憶などのデータを大量に交換してしまう！それを防ぐ為にコンピュータを経由しているんですよ！

でも、それは互いの意識すらも止めてしまいますが…。」と蒼凱は俯きながら答えた。

「それは一般人の場合だろう？俺の脳をメインとして使用すれば可能だろう？俺なら凱歌からの膨大なデータに耐えられる。そして、俺をメインにすれば俺からのデータは凱歌には行かない。

これで、負担が掛かるのは俺だ。」と龍冴は真剣な顔で言った。

「駄目です！危険過ぎます！確かに龍冴さんの脳なら可能かもしれませんが！それでは何かあったら龍冴さんに全ての負担が来てします！戻って来れないかも知れないんですよ！」と蒼凱は大声で反対した。

「それでも…。そうするしかないならそれをする！俺には、凱歌ときなこさんを保護した管理者としての責任がある！それに俺がそう簡単に廃人になるとでも思っているのか？これ以上の修羅場を何度となく、誰かさんのおかげでぐって来たんだ。」と龍冴は必死に蒼凱を言った。

そしてプロフェッサーを見た。

「分かった。但し何かあれば強制的に回線を切断する。それは龍冴、お前の精神の死を意味している。分かったな？」とそれまで黙っていたプロフェッサーが沈痛な表情と声で言った。

「プロフェッサー！分かっているんですか！？」

あのシステムは未完成であり、コンピュータを経由しないのは初めてなんですよ！」と蒼凱ははっきりと反対の意思を秘めた声で言った。

「どんなことにも始まりはあり、それは常に未知の世界だ。この状態では時が経っても戻る保障はない。はっきり言って戻らない可能性の方が高い…。時間的な事からも、これしか方法がない以上、やるしかないか…。」と天山が腕を組みながら言った。

「しかし…。」と蒼凱はまだためらっていた。しかし、少し間を空けてから口を開いた。

「分かりました。しかし、最善の策を取る為に少しだけ時間を下さい。昨日までに作った新しいプログラムを使いましょう。それなら龍冴さんへの負担を雀の涙程度かもしれませんが、軽減できると思います。」と腹を括った顔で蒼凱は立ち上がり言った。

龍冴は「装置の方は頼んだ。」と蒼凱の肩に手を掛け言った。

その時、きなこのそばに居た天山が、きなこの首に素早く手刀を食らわせた。

「すいません、きなこさん…。これからする事は貴方には酷過ぎる…。”心の壁”を無理矢理破る事がどれだけ危険であり、惨い事か…。きなこさんには、凱歌の”あんな姿”は見せたくありません。龍冴が入ってから起こしますからそれまで眠って下さい。」と優しく気を失ったきなこを扉の右側の壁に寄り掛けながら、天山が悲しげに言った。

「さあ、準備するか！凱歌の心の中へ向かって！」と龍冴は気合を入れ直した。

しかし龍冴の心中には、確かに蒼凱の言っている不安が無い訳ではなかったが、なぜか自信があった。

龍冴は知る由もなかったが、それは”零”の事があった為だったのかもしれない…。

～第57章～＜侵入＞

5分もしない内に蒼凱が”武道場1”に戻ってきた。

その手には脳波検査の時に使用していた物よりも太いケーブルとキーボード大の箱があった。

その間、龍冴は”気壁”を張る凱歌の前で正座で目を閉じていた。天山も同じ様に静かに目を閉じていた。

「プロフェッサーはしなくていいんですか？気を高める為の座禅というか、集中を。」と蒼凱は装置を準備しながら訊いた。

「なに、わしがした所で大して変わらん。奴等とは違って、経験多いからのう。それに一人で準備するのは大変じゃろ？」とプロフェッサーは微笑みながら言った。

「確かにそうですが…。しないよりした方がいいでしょ？僕なら大丈夫ですから、龍冴さんと凱歌さんの為にも集中して上げて下さい。」と蒼凱が言った。

「んん～。じゃあ、そうさせてもらうか…。」とやや面倒くさそうにプロフェッサーは言った。

それを聞きながら、『龍冴を一番心配しているのはプロフェッサーなんだから。素直じゃないな～。』と内心想ってしまった。

またそれとは反対に一番龍冴を信頼しているのもプロフェッサーである事も知っていた。

蒼凱が全ての準備を終える頃、龍冴達も気を高める為の座禅も終えていた。

「さあ、行きますか！まずは第一関門であり、最大の難関である”気壁”の破壊から。

”気壁”は壊しても気が残っている限り作られ続けてしまうから、完成する前に接続するしかない…。しかもこの”気壁”は未完成である分、厚みがバラバラであるが硬度、気の濃度ともに最上級もの。

下手に壊そうとすると上級気功術士でさえ危険にさらされるが、三人の気を合わせてやれば、出来なくないと思うが、これはやってみるしかない。そしてこれは一発勝負と言っていいと思う。心して掛かるう。」と龍冴は落ち着いた感じで言った。

そして三人の気が龍冴に集め始めた。その気の大きさは気を使えない蒼凱ですら分かるほどだった。プロフェッサーと天山は自分達が持つほとんどの気を龍冴に渡してしまった為、息を切らし片膝を付いた。それを見ている蒼凱は、その時ほど自分が気を使えない事を悔いた時はなかった。

二人の気を貰った龍冴はその莫大な気に振り回させない様に注意しながら、静かに目を閉じると右手に気を集中させ始めた。その強大な気が右手に集まり始めると、体内に入り切らなくなってしまった気が放電しているかの様にバチバチと音を立て、その姿を見せた。まさに電気の様だった。

そして目を開けた龍冴の瞳には、あの暢気な龍冴とは全く違う、鋭く全てを呪い、破壊しかねないと思わせる狂気さえも感じさせる光が宿っていた。「行くぞ！」と一声上げると、龍冴は気が有り余り煌く右腕を凱歌に向けて突き出した。凄まじい放電音に近い音が響き渡った。

しかし、龍冴は凱歌の”気壁”を破壊出来ずにいた。

着実に壁を崩してはいたが、このままでは龍冴が弾かれてしまうのは目に見える状態だった。

「くっ。」と苦痛に一瞬顔を歪めるが、「ハ～～～！！！」と声を上げ気合を入れると、先程にも増して右手の気が増し、凱歌の”気壁”の奥へと右腕が伸びて行った。

そして、遂に人の悲鳴というより魔王の断末魔の叫びと言っていいような、身の毛もよだつ声とともに”気壁”が消え去った。

龍冴はぐったりとする凱歌の体を素早く抱きかかえると、蒼凱の用意したケーブルを首にセットした。蒼凱は抱きかかえられる凱歌の頭に装置をセットしていたが、”気壁”が再び作られ始めた為に徐々に弾き飛ばされそうになった。

「蒼凱、頼んだぞ！」と龍冴は弾き飛ばされまいとしながら凱歌を抱いて言った。

「行きますよ！」と蒼凱は装置を起動した。

その瞬間、先程まで蒼凱を、龍冴を弾き飛ばそうとしていた”気壁”の気配が無くなった。そして、龍冴の体が力無く、凱歌の隣に倒れた。蒼凱は祈るような思いで二人を見つめつつ、二人の体を整えた。その”命のケーブル”を傷つけない様に…。

### ～第58章～<心の影>

そこは暗く無限に広がる闇の空間だった…。そこに、一人の男が立っていた。それは凱歌だった。しかし、その瞳には光が無くただ呆然と立っているだけだった。

凱歌のそばにもう一人、誰か居た。その姿は凱歌だった。ただその瞳は狂気に満ちていた。

狂気を秘めた凱歌は呆然と立つ凱歌に話し掛けていた。

「何も抑える事は無い。自分のしたい事をすればいい。人より優れ持ちえたこの素晴らしい力を存分に使えばいい。この力さえあれば、たったこの小さな鉛弾一発で狙った人間の命を自由に出来る。

生きるも死ぬも。そして人々を恐怖という力で支配すら出来る！あの時の優越感、快感は何物にも勝るはずだ。どうしてそれをせずに居られる！？」と狂気を秘めた凱歌が立ち尽くす凱歌の耳元で囁いていた。そして愛らしく立ち尽くす凱歌に後ろから両手を首に回し抱きしめると、更に付け加えた。

「誰も信じちゃ駄目だ。信じたって人は裏切られる。そう、信じていたボスでさえ騙していたんだ。愛する母さんだって僕達から逃げ出したじゃないか。ましてや、あの龍冴とか言った奴らなんて、僕達の力を利用しようとしているだけだ。信じられるのは俺だけだ。誰も信じちゃ駄目だ。」と狂気を秘めた凱歌のその甘く優しい声に立ち尽くす凱歌の意志が引き寄せられていった。

それを敏感に感じ取った狂気を秘めた凱歌は、不気味で怪しい笑みを浮かべた。

「さあ、凱歌。俺に全てを差し出すんだ…。その身も心も…。俺と一つになるんだ。」と囁き掛けていると、違う声が闇の中でこだました。

「それは困るな～。こいつには色々やってもらいたい事があるんでね。お前と入れ替わられたら困る。」と血の通わない冷血な声が響いた。

「誰だ！」と狂気を秘めた凱歌が声のする方を向いた。そこには紅髪、紅眼の龍冴が腕組みをして悠然と立っていた。

「やはり僕達を利用しようとしているだけなんだよ。相棒。」と狂気を秘めた凱歌が囁いた。

「ほら！そんな言い方するから勘違いされるんだよ、禍悪主！俺達は凱歌を元に戻す為に来たんだろうが！」とさっきと同じ声だったが、さっきとは違う血の通った感じの声だった。

狂気を秘めた凱歌は動揺した。そこにはもう一人銀髪、黒眼の龍冴が立っていた。

「なぜ、お前達がここにいるんだ！？第一なんで二人いる！？」と混乱した様子で狂気の凱歌は言った。

「自己紹介するか…。俺様達は究極の生命体”ホムンクルス”。そして俺様は”紅き死神”の異名を持つ暗殺者、名は禍悪主。さっきの質問だが簡単な事だ。俺様達は全く独立した人格ではあるが、器こそ一つというだけの事だ。だから、この精神世界に来てまで、わざわざ一つであり続ける必要はない！入ってきた方法はこいつに聞け。」と禍悪主は答えた。

「”ホムンクルス”ね～。いい響きですけど、結局は”人工生命体”という意味ですけどね…。

俺は”生”と”死”の使徒と務めている者。名は黒帝 龍冴。

入るのは結構大変でしたよ。君が時間を稼ぐ為に作った”気壁”を壊すのが大変でした。

でも、壊してしまえば精神世界に入るのは簡単です。

精神は高度な人間の脳が作り出した仮想世界ですから。そこに俺達の脳波を送ればいいんですから。」と笑顔で龍冴が答えた。

「邪魔をする気なら、お前達を消すまでだ！」と狂気の凱歌が立ち尽くす凱歌から離れ、言い放った。

「黙れ！」スナイパー・王凱歌。俺様達が用があるのはお前の隣にいる”人間・王凱歌”だ！

第一、貴様程度がこの俺様を消すだと！下らん、笑止千万！逆に貴様を消すまでだ！」と禍悪主は怒鳴った。

「ちょっと待て！そんなことしたら凱歌に影響が出てしまう。例え、”夜叉”であっても傷は付けられない！そんなことしようとしたら俺がお前を止める。」と龍冴が言った。

「分かっている。あまりにもアイツが下らない事を言うものだからな。」と禍悪主は『冗談が聞かない奴』だという顔して言った。

「ならいいけど…。同じ体の住人でも信頼が置けないからな…。それじゃあ、どうしても貴方は邪魔をするんですね？」と龍冴は禍悪主を睨んだ後、狂気の凱歌を見つめ言った。

「貴様達こそ、ここがどこだか分かっているのか？ここは俺達の世界だぞ。部外者がどうこう出来る所ではない！第一、なぜ俺を”スナイパー・王凱歌”と呼ぶ？」と狂気の凱歌が不敵に微笑んで言った。

「随分と簡単な事を訊くな…。確かにここは凱歌の精神内だが、精神世界で強さを決めるのは実世界の強さでも、主であるかなどではない。ここでの強さは精神力、心の強さだ。

そしてお前を”スナイパー・王凱歌”と呼ぶかだったな…。それはお前の生まれにある。

貴様はそこで立ち尽くしてる凱歌がスナイパーをしている時に感じた、人の命が自分に懸かっているという優越感、嫌な事をする時にそれを良い方向に考えようとする人間の心理から発生した快感。

そしてそれらを嫌い、忌まわしいものとし心の奥底に仕舞い込んだ。

それが形を成したものの。それこそがお前だ。違うか？だから”スナイパー・王凱歌”と呼ぶ。

そして元の意志であるそいつを”人間・王凱歌”と呼んだだけだ。」と禍悪主は面倒くさそうな感じで言った。”スナイパー・王凱歌”と呼ばれた狂気の凱歌は笑い出した。

「確かに俺はここに居る”人間・王凱歌”こそが俺を作り出した意志だ。でも、もう遅い。

相棒は俺に全てを譲ってくれるそうだ。これで何のためらい無く人を殺せる。」と”スナイパー・王凱歌”は笑顔で言った。

「本当にこいつが凱歌の一部なのか？予想外だな…。これほど残忍な”夜叉”を作り出すとは…。」と禍悪主は目の前に居る二人の凱歌を見比べながら言った。

「いいや。凱歌が本当に心優しいからこそこんなにも”やばい夜叉”になったんだ。

相当思い詰めていたんだ。だから、心の闇がこんなに強く、残忍な”夜叉”になってしまったんだ。

そしてそれを止められるのは本人だけだ。まずは”人間・王凱歌”の意志をはっきりさせないと…。

手伝ってもらえるかな、禍悪主？」と龍冴は気まずそうに禍悪主に訊いた。

「何の為にここに居ると思っている？手伝う気がないのならこんな危険な事に首を突っ込まずに自分の体に居る。そうすればもし失敗してお前が戻れなければ、体は俺様一人のものになる。

それをあえて来たんだ。手伝わない訳ないだろうが…。さっきも言ったが、凱歌には色々やってもらいたい事があってな。」と禍悪主は裏がありそうな顔で言った。

「色々と言きたい事が出来ましたが、それはちゃんと戻れた時に取って置きましょう。

「じゃあ…。”スナイパー・王凱歌”をお願いしてもいいですか？」と龍冴はためらい気味に言った。  
「あのな～。少しは信頼しろ！失敗したらどっちも死ぬんだぞ。第一、俺が”人間・王凱歌”の方に行っても、悪化させるだけだと思うぞ。」と禍悪主は少しムカッとしながら言った。  
「そうですね。じゃあ初めての協力戦。頑張りましょうか”相棒”。」と龍冴が禍悪主の顔を見ながら言った。  
「その”相棒”というのは言われるとむず痒く、気色悪いな…。」と眉にしわを寄せて禍悪主が言った。  
体を離れて初めて協力する事になった、元は同じ1つの意志の二人。暗い過去が作り出した”夜叉”を止め、凱歌を取り戻す為に戦いに向かう。そして二人の間に取り交わせた”見えざる”契約が姿を現す事に…。

ー続く

ーあとがきー

このような非現実的、『恋スナ』離れした作品を最後まで読んで頂いてありがとうございます！  
楽しんで頂けたでしょうか？久しぶりのあとがきを付けさせて頂きました。  
今回は完成披露試写会を見に行ってから初のものでした。  
掲示板にも書かせて頂きましたが”心につっかかりのようなもの”が残ってしまいまして、  
本当に一週間近くは何も手につかず、書く事も考える事も出来なくなっていました…。  
しかし、試写会では色々な意味で刺激を受けました。そして、私は”わが道を進む”事を決心致しました！これからもこのとんでもない展開を繰り広げて行くと思いますが、どうかこの作品をよろしくお願いします。

今回、改めて書き始める最大の要因になりましたのは掲示板にも書かせて頂きましたが、  
恋人はスキップさんの新作を読ませて頂きまして、創作意欲に火が付いたからです！

本当にスキップさんには感謝しております。そして、(11)を読んで頂いた方、感想を書いて頂いた方、  
皆さんありがとうございます！私のやる気を起こさせて頂きましてありがとうございました。  
何度も言いたい！本当にありがとうございました！

始めの所にも書かせて頂きましたが、今回から解説を二つに分ける事にしました。  
非現実的な話ですので、私が作りましたオリジナルの言葉や現象等が多く出てきますので、それをちゃんと説明する事と、実際に存在する言葉とを分ける為にも、解説を分けて付ける方がいいと思いますので作りました。今後の参考にして下さい。

最後になりましたがこれからも色々現実的でないSFのような話、展開を見せるとは思いますが、  
夢を見るような感覚で楽しんで頂けたら幸いです。本当にこれからもとことん”わが道”を進み、  
長々と続けちゃうと思いますが、よろしくお願いします！